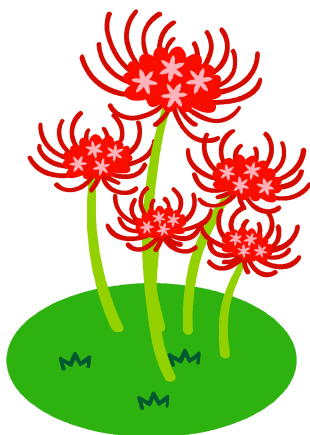


布教六十年記念大祭
並びに秋季靈祭及び
道願美祢子姫六十年祭

執行



目次

○写真（先師の書）

○祭員名簿

○記念大祭祭典次第

○金光教の歌「神人の栄光」

○金光教の歌「真心の道を迷わず失わず」

○祭典後教話

○写真（六十年のアルバム）

○寄稿

・布教六十年記念大祭並びに秋季靈祭をお迎えして」（教会長 野村颯璋）

・「記念祭を迎え、思う事」（副教会長 野村真二）

・「土佐高岡教会布教六十年記念祭を迎え奉りて」（野村登茂子）

・「布教六十年記念大祭をお迎えして」（野村道子）

・「布教六十年記念大祭を迎える中に」（野村清治）

・「土佐高岡教会布教六十年記念祭を迎え奉りて思わせて頂く」と」（岡本美代子）

○土佐高岡教会の沿革

○写真（先師の書）

生涯の信心修り

昭和三十三年十一月十五日

道願政治郎

昭和三十三年十一月十五日 教祖大祭の御祭主としてお越し下された時に、お書き下されたものです。道願政治郎親先生は、一代高知教会長であります。「生涯の信心修行」



昭和三十一年九月二十三日 布教十年祭の講師としてお迎えした時に、講演場所の公民館にて□にお筆を啜えてお書き下されたものです。中山亀太郎先生は、幼少の頃両手片足を列車事故に遭い失われ、信心によって救われたお方であります。「信心なれば世界が闇なり」 亀太郎謹書【絵は皿の上に□ウソクを描かれたもの】

天 地 金 乃 神

祖 靈 殿

御理解

第五十七節

金の杖をつけ、曲る竹や木も

折れる神を杖につけば、樂ぢや



この書は、すべて御本部にて書道を教えておられたミサワ師（資料無く氏名不明）の書かれたものであります。

初代野村ト三師と縁があつて書いて頂かれたそうです。

上の「天地金乃神」と「祖靈殿」は土佐高岡教会の旧御広前にて御神前と御霊前に、それぞれ額に入れて奉掲させて頂いておりました。新御広前では建物の都合上掲げることができなくなりましたので二階御広前の御神前に安置させて頂いております。右の御理解第五十七節は短冊に書いて頂いたもので、今も二階御広前の御神前と御霊前の間に掲げさせて頂いております。

重要なものでありますが、管理不十分なために虫に喰われて穴が開いているのが残念であります。土佐高岡教会においては大切なものであり今後に向けて何とか修繕がさせて頂きたいと願っています。

○祭員名簿

一、祭主

道願 どうがん

正美 まさみ

親先生

(高知)

一、副祭主

野村 のむら

穎璋 ひであき

教会長

(土佐高岡)

一、先唱役

野村 のむら

登茂子 ともし

(土佐高岡)

一、捲簾役 1

野村 のむら

真二 しんじ

副教会長

(土佐高岡)

一、捲簾役 2

野村 のむら

清治 きよはる

(土佐高岡)

一、後取

野村 のむら

道子 みちこ

(土佐高岡)

一、賛者

野村 のむら

清治 きよはる

(土佐高岡)

一、典礼

野村 のむら

真二 しんじ

副教会長

(土佐高岡)

一、取次唱詞先唱

津野 つの

晴枝 はるえ

小松 こまつ

芳子 よしこ

一、楽操作

野村 のむら

真希 まき

○記念大祭祭典次第

先、祭	次、捲	次、拝	次、神	次、取	次、祭	次、祭	次、天	次、副	次、参	次、神
祭員							地	祭	拝者	徳
			前	次	主	主				
簾							書	主	各	賛
			拝	唱	祭	玉		玉	代	詞
							附		表	
			詞	詞	詞	串		串	玉	
着										
							奉	奉	串	奉
			奉	奉	奏	奉	奉	奉	奉	
席	事	礼	唱	唱	上	奠	体	奠	奠	唱

次、「神人の栄光」 齊唱

次、拝 員 靈 前 転 座 礼

次、祭 員 靈 前 転 座

先、祭 員 着 奉 席

次、靈 前 拝 詞 奉 唱

次、祭 主 祭 詞 奏 上

次、祭 主 玉 串 奉 奠

次、副 祭 主 玉 串 奉 奠

次、参 拝 者 一同 玉 串 奉 奠

次、祖 先 賛 詞 奉 唱

次、「真心の道を迷わず失わず」 齊唱

次、祭 員 退 下

○金光教の歌「神人の栄光」

一、

天地^{あめつち}は神^{かみ}のふところ
人はみな神^{かみ}のいとし子^こ
かぎりなき神^{めぐみ}徳^みのなかに
生^いかさるるわれ等^らうれしき

二、

人^{ひと}の世^よにとわの光^{ひかり}を
いとし子^こにつきぬみかげを
誓^{ちか}わしし教^{みお}祖^やの神^{かみ}に
救^{すく}わるるわれ等^らうれしき

○金光教の歌「真心の道を迷わず失わず」

一、
真^{しん}末^{すえ}

二、
真^{しん}末^{すえ}

教^{おし}教^{おし}の迷^{まよ}心^{じん} 教^{おし}教^{おし}の迷^{まよ}心^{じん}

ええ末^{すえ}わの ええ末^{すえ}わの

伝^{つた}伝^{つた}ま ず道^{みち} 伝^{つた}伝^{つた}ま ず道^{みち}

ええで失^{うしな}を ええで失^{うしな}を

よよ わ よよ わ
ず ず

○ 祭典後教話

講師

金光教高知教会
道願 正道 大先生

講題

「土佐高岡布教六十年を迎えて
ー思い出すこと これからのことー」

読師

金光教土佐高岡教会
野村 清治

・「立教神伝」捧読
・講師紹介

○写真(六十年のアルバム)

布教に出発の日



野
村
ト
ヨ



(↑野村トヨ師・御結界にて)



(→旧御広前大祭)



(↑大祭・立教神伝捧読)



(↑講師・中山亀太郎師)

上の写真は布教十年の記念誌に掲載されていたものです。掲載されたものを、高知親教会を出発される際に、撮影して頂いたと思われまふ。神様と高知教会初代道願縫師の御霊神様、道願美祢子師の御霊神様を持たれ、今も教会にありますが、小さい肩掛けの袋に入るだけの最低限の荷物しかない。布教地を目指し今日住む家すら出てもなく、神様を杖にしての出発であられたと思います。



(↑大祭祭員記念写真)



(↑ 元日祭にて)



(↑ 御本部祭場前にて)



(↑ 土佐高岡教会少年少女会)



(↑ 土佐高岡教会少年少女会)



(↑ 宇佐の海を眺め)



(↑ 旧教会屋根の上にて)



(↑ 宇佐布教所にて)

(→ 歴代教主奥城前にて30年位前)



(↓ 先代野村トヨ師の還暦にて)



(↑ 教会家族写真・教会長撮影)



(↑ 高速道サービスエリアにて)

(→金光新聞の取材にて撮影して頂く)



(→御本部正面境内にて)



(御本部正面境内にて)



(→御本部歴代教主奥城前にて25年位前)



○寄稿

『布教六十年記念大祭並びに』

秋季霊祭をお迎えして』

教会長 野村 穎璋のむら ひであき



(→土佐高岡教会長)

初代教会長、故野村
トヨ親先生が先の
太平洋世界大戦の
敗戦後の、昭和二十
一年九月二十三日に
高知親教会の手続きを

もつて、旧高岡町吹越にて岡崎家の二階の
一部屋を借りて、高知から神様のお社と、
高知教会の初代故道願縫親先生と故道願
美祢子先生の御霊様のお供をして、一歩
一歩歩まれ高岡にこられ、布教が始め
られたのであります。

先代の願いは、ただ一つ難儀な氏子を
生神金光大神御取次の道により、ただただ
救い助けてやりたいとの思い一筋に寝食を
忘れて座り、祈念を込められたのであります。

その尊き祈りは人から人へと伝えられ、
病気にでもなれば死ぬるのを待つしかない
ような、物不足の中にありて、薬が不足して
いるのでありますから、医師から手を
離された人々が次々と取次のお働きを
受けて助けられ、その勢いは止まることを
知らぬ程であつたと聞かされております。

先代親先生は高知教会初代教会長が、
金光教祖より賜りし「女の一心岩をも通す」
とのみ教えを我が身に頂き、布教に専念
なされたのであります。

先代のご精神は、神様、金光様、親先生と

頂き、道を立て抜くことこそがおかげの
頂ける「コツ」であるという信念にあられたと
思います。

珍しい物がお供えになればまずは親先生に
頂いてもらわねばとの思いから、針木を
越えては歩いてお持ちなられたと聞いて
おります。

何も親先生が珍しいからというのでは
ありません、親先生にすれば何にも珍しい
ものではなかったかも知れません。

しかし、親を大切に思うその心が神様に
通じる心なのであります。今日の人間の
失われた尊い心なのであります。

今は世間でもお道の信心の世界の中でも、
親を頂くとか親を立てるとか、という心が
失われて、とかく、親を大切になどという
古臭いとか、信心の世界でも金光様は親を
大切に申されても、今時そんな古臭い

ことをいうから人が信心をしないのである
かのよつに思つたり、言われたりすることが
あります。

親は決して友達でないのです。親はどんな
親でも親であり他ではないのです。

これがおかげを受ける「コツ」でもあるのです。
親を立てることを知れば、先輩を立てる
ことを知ります。先生を立てることも知り
ます。人を立てることも知ります。これが
おかげなのであります。これで道が立つので
あります。

そして、神様を神様として立て仰いで祈る。
疑うということを知らない、どこまでも
信じてやまない心を、先代親先生は私共に
残された信心ではないでしょうか。

ここで改めて先代親先生の信心を見つめ
直して、今の時代であるから改めて頂き
直して、今日にこそ古臭いではなく、

新しい信心であるという確信をもって信心を進めて参りたいと思います。

信心も道を立てねば信心にあらず

道を立てることを知りて信心となる

『記念祭を迎え、思う事』

副教会長 野村 真二 のむら しんじ



(↑右から二人目が真二師)

私も、この世にお陰を頂き、ちょうど四十年の節目の年齢を迎えさせていただきました。四十にして惑わずと先人は、申されましたが、まだまだ惑うことしきりでございますが、一つ間違いないと思うことができてまいり

ました。

それは、信心の中、側にいれば、何も無い人よりは、明らかにお陰頂くと言つことです。

最近、私が交通事故で、奇跡的なお陰を頂きました、その時に、周りの信心していない友達達の、反応を見て、確信しました。

みんな人間は、なぜよいことにこの人は、なつたんだろう？常に見てるんですね。

私が、金光教の教師であることを、友達は、みな知っておりますから、自分達も、もしもの時にお陰頂きたいから、神様をお願いしてくれ、と言つのです。

それで交通安全の祈願祭をさせて頂きました。

友達一同が、安心のお陰を頂きました。

信心させて頂く者は、周りの人々に、いかに神様のお陰を知らしめるか、これが神様に対しての一番の御礼であります。

この記念祭、この節目を通して、より神様に
日々の御礼がさせて頂ける自分にならせて
頂きたいと思います。

『土佐高岡教会布教六十年』

記念祭を迎え奉りて』

野村^{のむら}登茂子^{ともこ}



(→登茂子師)

皆様にはお元気で
お暮らしてでしょうか。
今日は土佐高岡教会
布教六十年の記念祭の
年を迎えさせて頂き、
私の聞かせて頂いたり、また先代親先生と
共に御用させて頂きます中に、思わせて
頂きましたことなど、神様、金光様、御霊神様、
先代親先生に御礼の気持ちで書かせて頂き

ます。

昭和二十年七月四日の高知の空襲で、
高知親教会も何もなくなられ、その時、
親教会で修行中であられた野村トヨ師も
共に空襲の被害を受けられ、何もない身に
なられました。

道願政治郎親先生がトヨ師が布教させて
頂くに当たり、昭和二十一年四月の春、
御本部の御大祭に布教地をお決め頂くから
とのことで、共に御参拝になられ、三代
金光様に御取次をして下さいました。

親先生が紙に、高岡町、御免町、野市町と
三つの地名を書かれ、「思し召しの所に丸を
つけてやって下さいませ。」とお願いして
下さると、三代金光様は、高岡町という所へ
丸をつけて下さったとのことでした。

これでトヨ師の布教地が決まり、旧高岡郡
高岡町に布教されることになられたので

あります。

二年間の高知親教会での修行を終えられ、昭和二十一年九月二十三日、女の身一つでトヨ師四十六歳で布教地である高岡町へ四里の道を、神様、御霊神様のお供をされ、神様の御神徳を信じ切られて、只ひたすら心中祈念をされながら、歩いて高岡へ出発されたのであります。

高岡町吹越まで来られると、一軒の店の前で急に足が前に進まなくなり、どういうことであろうと思われる、引き返すと歩けるのに前には進まないということ、トヨ師は仕方がないので、その店に入られ、色々話をされると、店の主人がそういうことなりというので、一階を貸してもらえということになり、布教地で御広前が定まり、何もなしの中に神様、御霊神様を御祭りされ、土佐高岡教会の御布教が始められたのであります。

それから今年で布教満六十年の記念祭を九月二十三日で迎えさせて頂くことになったのであります。

土佐高岡教会は、神様、御霊神様の御神徳のおかげの中に、三代金光様の思し召しのままに、おかげを頂かれた土佐高岡教会であると、私は本当に有り難くもつたいなく感無量の思いが致すのでございます。

先代野村トヨ師の布教のご苦勞は、本当に何一つない無からの出発の御用であられ、すぐられるのは、神様の御神徳一筋で、難儀に苦しむ多くの人々のことを、寢食を忘れ祈り抜かれたことを聞かせて頂きました時は、私は本当に筆にも言葉にも尽きせぬ思いであられたことと、今も胸の詰まる思いが致すのでございます。

その先代野村トヨ親先生のご苦勞を頂いて、後の御用を継がせて頂いた私共は、神様、

金光様、御霊神様、先代親先生、人様のおかげを頂いて日々御用に使うて頂けますこと、本当にもつたいなく、有り難く御礼より他にない思いで御用に使うて頂いている私でございます。

先代親先生は昭和四十七年十月六日、本当に神様のおかげを頂かれ、最後まで御取次の御用をなさり、満六十九歳、数え年七十歳で御帰幽になりましたが、その二日前には、御本部の教祖大祭にも参拝者一同の人と共に教会長として御礼参拝され、お装束もつけられ御大祭の参列の御用もなさり歸りて、私に、

「私は二十四歳の時、命の亡きところを神様に助けて頂き、数え年七十歳の今日まで、自分のしたいことは、みなさせて頂き、子供のなかった自分が子供をお授け頂き、孫まで恵まれ、いっお国替えさせて頂いても、何の

思い残すこともない、私が死んだらお前も泣いたりせずにお祝いで送り出してくれよ。」と言われました。

お国替え当日には、お昼まで信者様の御取次の御用をなさり、夜八時二十分頃、医師にも診察を受け、御神米を頂かれ、神様、金光様、親教会親先生、信者様、私共に御礼を言われ、安らかに先代親先生願いの通りのおかげを頂かれ、お国替えになられたのであります。

私は先代親先生の御最後に合わせて頂き、どのような時も神様一筋に頂かれ、親教会親先生を頂き切られ、親先生母の願いに私は一つだけ反して、涙の枯れるまで泣きてのお別れでしたが、一人でお許し下さったのではないかと思わせて頂いています。私が、私はどんな時も助けて頂いた親先生、御生前中も霊様になられてからも、

私と共に御用して下さると言って頂いたお言葉を信じて、どのようなこともお願いさせて頂いて、有り難く御用に使うて頂いております。

先代親先生は、どんな時も神様、金光様、親先生、人様に感謝御礼の心を持たれ、信心をいつも進めること、愚痴不足にはおかげは頂けない。

心入れかえ教えを生かせと教えて下さいました。

この六十年祭を頂いて改めて先代親先生より頂きました数々の御教えを心に頂き、信心の稽古を進ませて頂いて、土佐高岡教会で人の助かる御用のお役に立たせて頂きたいものとお願ひさせて頂いております。

又この度、道願美祢子先生の六十年祭をお仕えさせて頂きましたが、美祢子先生は先代親先生が高岡へ御布教になられる

昭和二十一年一月二十一日に高知親教会で、修行中に戦後の御苦労から一病気になられ、先代トヨ親先生がお世話をさせて頂かれ、二十五歳の若さでお国替えになられたとのこと、一遺言で、

「私は教会に生まれさせて頂き、神様のおかげでお育てを頂きながら、何のお役にも立たず、今お国替えさせて頂くことは、本当に申し訳なきことに思います。」

野村さんは、いずれどこかに布教させてもらわれることでしょうか、その時、私を布教地に連れて行って下さい。

私は霊として野村さんと共に人の助かる御用のお役に立てて頂くから。」

と言つて下さり、お国替えになられたとのことであります。

先代野村トヨ親先生は、そのこと御父君であられる道願政治郎親先生に申し上げると、

「そういう思いであるならば高岡へ連れて行って下さい。」

とのお許しを頂き、先代親先生は、初代道願縫師の御霊様と道願美祢子先生の御霊様をお供されての御布教であられたので、先代親先生と共に霊様として私共を今日まで助けて頂いた六十年祭でございますが、本当にもつたいない有り難いことに思わせて頂きます。

先生方の御守り御導き、先代親先生の御苦労なくして、今の土佐高岡教会はないことを思わせて頂く時、御恩を忘れてはならないと思わせて頂きますと共に、感無量の思いが致すのであります。

神様、御霊神様、金光様、先代親先生、有り難うございました。

『布教六十年記念大祭をお迎えして』

野村道子^{のむらみちこ}



(↑奥から二人目が道子師)

重ねがあつてこそこのことです。

天地の親神様のおはたらきの中、初代教会長先生の真一心のご信心はもとより、初代教会長先生のご神徳に触れて、お道のご縁につながった信奉者の方々の深いお祈りの賜物ではないでしょうか。

初代教会長先生が、ご苦労されながらも

布教六十年という節目を、皆様と共に迎えることができ、大変ありがたいと思います。六十年というのは、長い年月ではありますが、日一日の積み

のこして下さったお徳に感謝の気持ちを忘れず、心新たに、信心を土台にした生活ができるよう、取り組ませて頂きたいと思います。

『布教六十年記念大祭を迎える中に』

のむら きよはる
野村 清治



(→清治師)

布教六十年記念大祭を迎えさせて頂く中に、六十年は当たり前では迎えられることであると感じるのであります。

記念祭の節年には様々なことが起こってまいります。

先だつて私も交通事故に遭うということも

あったのですが、一瞬先のことが分からない。自分自身がどんなに気をつけていようが、向いづから悪いことが起きてくることもある。分かっておれば避けることも出来るかも知れないが、その一瞬先が分からぬ中では避けることも出来ないであります。

避けることが出来ないのであれば、受け止めるしかないであります。

また神に頼みますがりして、お守りを頂くしかないであります。

自分が自分だと申したところで、その自分も一瞬先に生きているのか死んでいるのかも分からないのであります。

事故に遭ってみて心からそれが分からせて頂きました。

朝日を浴びてのんびりと走るバスの中で、次の瞬間に人の生き死に関わることがあるとはなかなか想像もできぬことでもあります。

それが突然に急ブレーキが踏まれ、一瞬の後には目の前の景色が変わる。

穏やかにさえ感じられたバスの車内が、瞬間に窓ガラスが飛び散り、柱が折れ曲がり、椅子が弾け飛び、辺りに血しぶきが飛び散る。

何事かと思う間さえない状態。

外では死んでいく人を目の辺りにして眺めることしかできず、ただに祈ることしかできぬ私である。

自らの無力を痛感する中に、今こうして生かされていること自体が奇跡であるように感じられる。

教会のことを考えさせて頂いても、六十年も教会を続けさせて頂く中に、神様、御霊様が生きてお働き下され、どれだけのおかげを頂いてきたのであろうか、どれだけのお守りがあつたのであろうか。

そしてそこには、どれだけの祈りが込め

られてきたのであろうか。

人それぞれの受け止め方は違うのだけれども、私がどう思うのか、どう感じるのかは、自らの生き方で決めるしかないのであります。

難儀のご真ん中にあつても、私が幸せだと感じておれば、それは幸せなことなのです。他人が決めることではない、私が決めることなのです。

しかし、私だけが幸せでも助からないのです。周りに幸せと感じられない人がいれば、そこを祈らずにはおれないのであります。信心させて頂く、おかげを受けるということも、人によって気づかないだけ、おかげは常に受けているのです。

ただそれに気づき幸せだと感じられるかどうか。

私はそれに気づいてもらいたいと祈り

伝えるばかりなのであります。

人生には思いもかけないことが起きてくることもあります。

大半のそこに至る原因は自らの生き方からなつたのであります。

間違えておつたことに気づかなかつたのか、改まらなかつたのか、けれども結果としては誤魔化したり許されることもなく正直に現れる。

どんな結果であろうと逃げることはできないのであります。

自分の生き方ではなく悪いことが向こうから起つてきたのだとしても、そこに心を配ることができなかつた自分の責任としてそこから逃げることはできないのです。

けれども起つてきたことを、おかげと受けるか、難儀と受けるかは別問題なのです。

病気をしても、病気そのものは難儀で

あるかも分からないが、その病気を通じておかげにするか難儀にするかは心次第なのであります。

わずかなことかも知れませんが記念祭を迎える中にも、大変なことと思うのか有り難いことだと思つのかでも、後になつて変わつてくると思つのです。

実際には当たり前のことなどはありません。例えば実際、記念祭を仕えさせて頂くことは大変なことであります。

ただそこを迎える時の私の心はどこを向いてあるのか。

準備をしたり調べたり目に見える問題は言つても楽なものです。

ただ目に見えぬ心を誤魔化したり、見なかつたことにするのでは記念祭を仕える意味がありません。

気づいたこと感じたこと、新たに問い

直し見つめる機会を神様は私達に示して下されているのだと思うのです。

記念祭の年に苦しいこと難儀なことを通っているのは、自分だけではありません。

□に出せぬ思いを皆、心に秘めたまま生きているのであります。

起ってしまったこと、その事柄から逃げることはできないのです。

そこをどう生かすことにつながるのか、それぞれが取り組まねばならぬ課題であると思うのであります。

自分の生きる人生を他人はかわってくれません。

夫婦であつても親子であつても、友人知人であつてもかわってくれることはないのです。

それは、めいめいが自分の人生を生きているからであります。

そこを当てにしたり、不足を言つても難儀に

なるばかりであります。

その中であつて目に見えぬ神様、御霊様は側で心配もし、生かそうとして守つて下されようと共に生きて下されてあります。

目に見えないからと粗末にするのは恩知らずと言つたものです。唯一自分の人生と共に生きて下される神様、御霊様にまず感謝をし、お礼を申す心がいるのではないでしょう。その心にならせて頂けるだけでも、心が少し元気になります。

何事であつても、ことを成すには稽古がいります。毎日毎日の稽古の中に、ことを成すことができるのです。毎日、愚痴や不足を申す稽古をされている人は、いつでも愚痴不足に思える心を育てているのです。

毎日、感謝とお礼を申す稽古をされている人は、どんなに相手が悪意を込めてきても、相手もあきれるほどに感謝お礼を

申せるものです。

そこには相手を認め思いやる心が必要であると感じます。

相手が責めてくるからと責める心では人は助かりません。

相手が責めてきても、愚痴不足をすべて聞かせてもらい、なお相手の助かりを祈れる心が神心であります。

生きてても死にても神任せ、後は自らがせねばならぬことを、一つ一つおかげを受けながらさせて頂いていくことが幸せなのであります。

他人の人生まで背負うようにしたり、自分の後のことまで決めるから難儀になるのです。後のことは私が決めることではない。「人は人、自分は自分、されど仲良し。」と他人の人生のことは助かりを神様に祈り、決めつけるのではなく助言を申すにとどめる。

私は今、後悔をせぬように生きるまでのことと腹を決めれば、楽に生きられます。

立教神伝の「死んだと思うて欲を放して」ではありませんが、自分が死んだと思うてみたら分かると思うのです。

自分が死んだ後も家族や他人はそれなりに生きていくくれるものです。

私がどうにかしてあげなければ、この人は生きていけないということはありません。それぞれ自らがしなければなくなると考えもし、実行に移し体験し、失敗して努力する中に、人は成長をさせて頂けるのであります。

手をさしのべることは、悪いことではありませんが、過ぎると人のおじやまになります。人のお役に立つとは、時にただに祈りを持つて見守ることでもあります。

祈り見守りつつ、本当に助けを求めて

きた時に、代わるのではなく手助けをするのが人のお役に立つ信心親切であります。

金光教祖のみ教えに「神様が『百姓をやめよ』と言われてから、三年間百姓をした。これをやめては、うちの者らがどうしようもなくなると思いながら、二年間した。それから後『今日から肥灰（農業）をさしとめめる』と仰せられたので、すぐにやめた。そうしたら、神様が『やめてもさしつかえなかったのに、どうしようもなくなる、どうしようもなくなる』と思つて、してきたなあ」と仰せられた。」とあります。

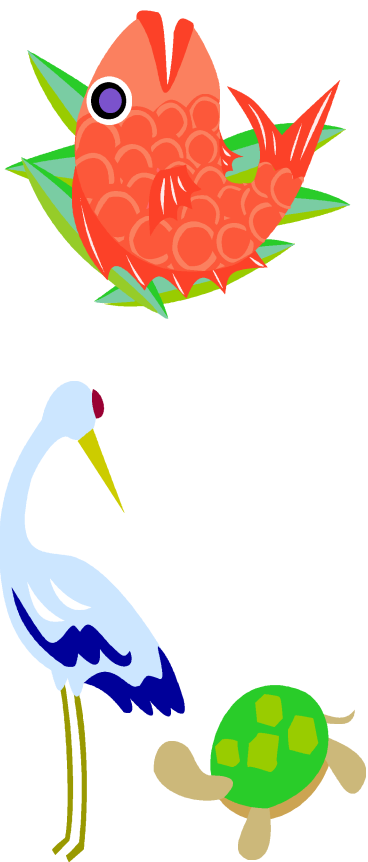
教祖様も、当初は人間心でなかなか思い切れぬ所もあったようですが、神様は責めるでもなく三年間をじつと見守り待たせて下され、立教神伝の区切りをもって心を定めさせて教え諭して下されたのであります。

この記念祭も、一つの区切りであります。

節年を迎え、それぞれに起こりくることに、神様の言葉、御心が現れているように思つてあります。

この記念祭を迎えるは、私に神様が立教神伝を下されたとの思いを持つて、今後の生き方に現させて頂きたいと願つてであります。

まずは神様を本当に信ずることが神様に心を向け助かる生き方になるのだと感じます。この記念祭を通じて共にのおかげを蒙らせて頂きましよう。有り難うございました。



『土佐高岡教会布教六十年記念祭を

迎え奉りて思わせて頂くこと』

おかもとみよこ
岡本 美代子



(↑左端手前が岡本美代子氏)

私は今は島根県の
浜田市で一人暮らしの
おかげを頂いております。
遠くにおりましても
日々土佐高岡教会を
親教会として、信心の
稽古に励ませて頂いて
おります。

この度、教会だよりを頂いて、九月二十二日に
布教六十年の記念祭並びに秋季霊祭を
お仕えになられるとのこと、私も今日までを
振り返らせて頂き、思わせて頂きますこと、
少し書かせて頂きます。

私も六十年前前は土佐高岡教会先代野村トヨ
親先生と御神縁を頂き養女として、親子で
共に暮らさせて頂いたこともございますが、
養女の話が出た時は、信心のことは余り
考えておらず、学校に行かせてもらえると
いうことが魅力だけの考えで、受けさせて
頂いたようなことでございました。

先代親先生は、昭和二十一年九月二十二日に
教会として布教の御用を始められました。
そして、私を土佐高岡教会の後継者として
御用に使うて下さるため、御本部にある
金光教学院本科二年の部に入学させて下さり、
無事卒業させて頂きました。

親先生は私に、「信心というものは、理屈を
言つてはならぬ。例え、神様が白い物を黒いと
仰せられても素直な心で『ハイ』とお受け
させて頂かねばならぬ。疑つてはならぬ。」と
教えて下さいました。

でも私はそんなわけの判らない事はないと理屈を言い、信心のことがわからず、神様はお姿も見えず、お働きもわからず、我情我欲の強い者で疑いもし、親先生にいろいろ苦勞をおかけし、私も毎日悩み苦しみました。

私も一人で布教に出て御用させて頂けば、信心のことがわからせて頂けるかもと思わせて頂き、宇佐で布教の真似事のような事もさせて頂きましたが失敗に終わり、親先生も私を実家の籍に戻して下さいました。そして教職も返上して下さい、普通の社会人にならせて頂きました。

その後縁があつて岡本家に嫁ぎ、一人娘にも恵まれ、その娘も嫁がせて頂き、孫娘二人の顔も見せて頂き、夫とは四十年近く円満に添い遂げさせて頂き、夫は晩年、脳梗塞にかかり、在宅介護で見取らせて頂きました。

土佐高岡教会も私が出た後、実妹が

御神縁を頂き、親先生と共に御用させて頂くことになられ、親先生御帰幽後も皆様共におかげ頂かれ、現在の土佐高岡教会におかげを頂かれて、私は本当にもったいなく有り難いことと感無量の思いが致しております。

神様はどんな人であつても心改め、日々信心の稽古を進めさせて頂けば、いろいろの事のある中にも必ず助けて下さると、私の人生を振り返り、有り難く、もったいなく思わせて頂いております。

私も今年は十二月十八日で喜寿を迎えさせて頂くことになりましたが、生命のある限り、神様と御霊神様に御礼とお詫びを申し上げ、今月今日を大切に信心の稽古をさせて頂いて、少しでも御用のお役に立たせて頂きたいとお願いさせて頂いております。有り難うございました。

○土佐高岡教会の沿革

(昭和21年9月23日) 旧高知県高岡郡高岡町吹越ふくしの岡崎茂太郎おかざきも たらう方に仮布教所設置

(昭和21年9月23日) 布教記念日

(昭和21年9月29日) 開教式

(昭和22年11月3日) 旧高知県高岡郡高岡町乙一三一【青木町あおきちやう】教会移転

(昭和22年12月10日) 故野村トヨ師くんとつ訓導に任ぜられる

(昭和23年3月1日) 金光教土佐高岡教会設立認可

(昭和23年3月1日) 故野村トヨ師は教会長に任ぜられる

(昭和23年8月11日) 少年少女会結成登録

(昭和24年12月10日) 故野村トヨ師いんしやういっしき権少講義に任ぜられる

(昭和25年6月10日) 高知教会在籍の旧姓野村美代子みよこ師は金光教教師に任ぜられる

(昭和25年) 旧姓野村美代子師は養子縁組を解消し旧姓雷いかづち美代子師となる

(昭和26年3月26日) 家屋一棟宅地二十一坪一号九勺が教会所有となる

(昭和27年12月10日) 故野村トヨ師つよし小講義せうこうぎに任ぜられる

(昭和28年) 信徒会、婦人会、青年会結成

(昭和28年8月5日) 二階建で一棟増築

(昭和28年) 旧姓雷美代子師は宇佐布教所を開所

(昭和30年8月16日) 旧姓いかづちともこ雷登茂子氏が土佐高岡教会にお引き寄せ頂く

(昭和31年9月23日) 布教十年記念大祭

(昭和31年) 旧姓雷登茂子氏が故野村トヨ師の養女となり野村登茂子氏となる

(昭和34年6月10日) 野村登茂子師は金光教教師に任ぜられる

(昭和34年) 野村登茂子師は副教会長に任ぜられる

(昭和34年) 旧姓雷美代子師は教職を辞し岡本家に嫁おかもとぎ岡本美代子氏となる

(昭和34年) 市制施行のため登記の変更により教会住所が

高知県土佐市高岡町字西連寺せいれんじ乙二二九番地四に変わる

(昭和36年9月23日) 布教十五年記念大祭

(昭和39年4月26日) 須崎すさき教会在籍教師旧姓川田かわだ穎璋ひであき師を迎え登茂子師と結婚し

養子となり野村穎璋師となる

(昭和39年)

野村登茂子師は副教会長を辞任せられる

(昭和39年)

野村穎璋師は副教会長に任ぜられる

(昭和40年2月28日)

穎璋師、登茂子師夫婦に長女真子しんこが生まれる

(昭和40年3月30日)

長女真子は発育不全にて御帰幽

(昭和40年8月25日)

穎璋師、登茂子師夫婦の長男真一しんいちは流産にて御帰幽

(昭和41年8月6日)

穎璋師、登茂子師夫婦に次男真二しんじが生まれる

(昭和41年9月23日)

布教二十年記念大祭

(昭和46年8月17日)

穎璋師、登茂子師夫婦に三男清治きよはるが生まれる

(昭和46年9月23日)

布教二十五周年記念大祭

(昭和46年12月)

教会取り壊し

(昭和47年3月5日)

教会新築落成

(昭和47年10月6日)

故野村トヨ師御帰幽

(昭和47年)

野村穎璋師は二代教会長に任ぜられる

(昭和47年) 野村登茂子師は副教会長に任ぜられる

(昭和51年9月23日) 布教三十年記念大祭

(昭和61年9月23日) 布教四十年記念大祭

(昭和61年5月19日) 野村真二氏は新宿教会しんじゅく在籍教師旧姓岸井道子師きしいみちこと結婚する

(昭和61年10月30日) 真二師、道子師に長女真希まきが生まれる

(昭和62年6月10日) 野村真二師は金光教教師に任ぜられる

(昭和62年) 野村登茂子師は副教会長を辞任せられる

(昭和62年) 野村真二師は副教会長に任ぜられる

(昭和62年11月17日) 真二師、道子師に長男道徳みちのりが生まれる

(平成3年6月4日) 真二師、道子師に次男真道まさみちが生まれる

(平成4年6月10日) 野村清治師は金光教教師に任ぜられる

(平成8年9月23日) 布教五十年記念大祭

(平成10年8月7日) 宇佐布教所を閉所

(平成18年9月23日) 布教六十年記念大祭

平成 1 8 年 9 月 2 3 日 発行

宗 教 法 人
金 光 教 士 佐 高 岡 教 会
教 会 長 野 村 穎 璋
〒781-1102
高知県土佐市高岡町乙129番地4
TEL/FAX (088) 852-1402
メールアドレス konkokyo@happy.interq.or.jp
ホームページ <http://konkokyo.jpn.ch/>

発 行 者 野 村 清 治

